

令和6年度 幼児教育研修（年齢別運動あそび3・4・5歳児）
「幼児（3・4・5歳児）の子どもの運動あそびと発達について」
～モデル事業 指導案を通して～

日時： 3歳児 令和7年 1月14日（火） 15:00～17:00
4歳児 令和6年11月19日（火） 15:00～17:00
5歳児 令和6年10月15日（火） 15:00～17:00

会場：足立区生涯学習センター

講師：日本体育大学 教授 齊藤 多江子 氏

子どもが「やってみたい」「おもしろそう」と身体を動かしたくなる環境の工夫について、保育所保育指針の保育内容を丁寧に読み取り、指導案の作成方法について学びました。

幼児期における運動の意義

幼児期運動指針（文部科学省）より

- (1) 体力・運動能力の向上
- (2) 健康的な体の育成
- (3) 意欲的な心の育成
- (4) 社会適応力の発達
- (5) 認知的能力の発達



幼児教育において育みたい資質・能力（3つの柱）

保育所保育指針（厚生労働省）より

知識及び技能の基礎： 気付く・できる

豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かたり、できるように
なったりすること

思考力・判断力・表現力等の基礎： 考える・試す・工夫する

気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、
工夫したり、表現したりする

学びに向かう力・人間性等： 心が動かされる・やりたくなる・ 続けていこうとする

心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする

幼児期に身に付けたい基本的な動きを引き出す遊び環境

○幼児期は多様な動きが見に付きやすい時期である。保育の中でも、多様な動きを経験する環境をつくる
ことが求められる。

（幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領）

領域・健康「多様な動きを経験する中で、体の動きを調整するようにすること」と記載されている。

○「やってみたい」という思いを引き出す遊び環境を工夫することで、一人ひとりの子どもが自分で遊びを
選び（「自発的な活動としての遊び」）、「できるようになりたい」等の思いから体の使い方を試行錯誤
することが多様な動きを経験することにつながる。



「多様化」（新たな動きの獲得）と「洗練化」（身に付けた動きの上達）

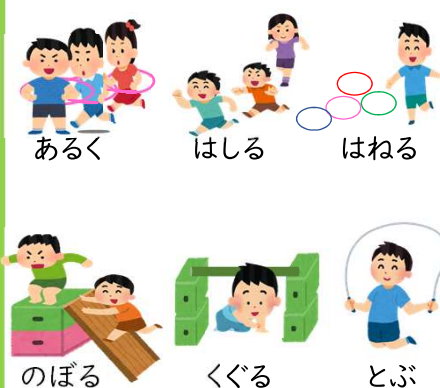
多様な動き【3種類の動き】

子ども主体の保育のための指導計画 運動遊び 日本体育大学 2024年9月

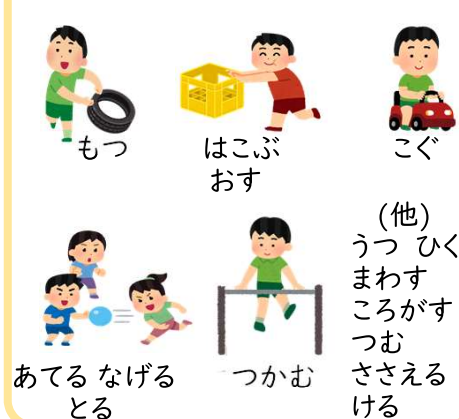
★体のバランスをとる動き



★体を移動する動き



★用具などを操作する動き



保育内容・5領域

5領域に関する学びが、大きく重なり合いながら、生活や遊びの中で育まれていくということを踏まえた保育内容になっている。5領域が全て運動遊びに関わっている。



【健康】内容の取扱い

- ・十分に体を動かす気持ちよさを体験し、自ら体を動かそうとする意欲が育つようにする
- ・様々な遊びの中で、体を動かす楽しさを味わう、多様な動きを経験する中で、体の動きを調整するようにする

【人間関係】内容の取扱い

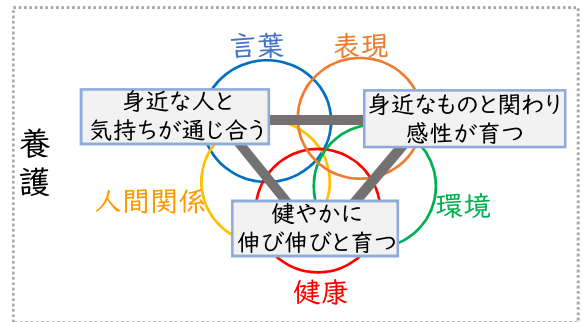
- ・試行錯誤する、諦めずにやり遂げることの達成感や前向きな見通しをもって自分の力で行うことの充実感を味わうことができるようにする
- ・一人一人を生かした集団を形成しながら人と関わる力を育てていくようにする
- ・他の幼児と試行錯誤しながら活動を展開する楽しさや共通の目的が実現する喜びを味わうことができるようにする
- ・他の幼児との関わりの中で他人の存在に気付き、相手を尊重する気持ちをもって行動できるようにする
- ・自己を発揮する中で、互いに思いを主張し、折り合いを付ける体験をし、きまりの必要性などに気付き、自分の気持ちを調整する力が育つようにする

【言葉】内容の取扱い

- ・自分の感情や意志などを伝える
自分の思いを言葉で伝える、言葉による伝え合いができるようにする

【表現】アねらい-②

感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。



【環境】アねらい-②

- ・身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする



計画に迷ったときは、指針P5 保育の考え方を確認するとよい

保育所保育指針 厚生労働省 2017年3月31日告示
第2章 保育内容 3 3歳児以上児の保育に関するねらいおよび内容 より抜粋

《実践》子どもの姿から考える週案を作成する(3・4・5歳児)



①先週の子どもの姿を振り返る

子どもたちは「何をどのようにたのしんでいたか」「保育者や友達はどうにかかわっていたか」、子どもの姿から来週に向けて「次はどのようなことを経験してほしいのか」を考えていく。

- ②「予想される子どもの姿」には、同じ遊びの中でも、子どもたちが「経験するであろう」ことを複数の視点(領域)から予想する。
- ③「予想される子どもの姿」に合わせて、「環境構成」や「保育者の援助」を具体的に(実際の行為内容)考える。

【例 おいかけっこ】

- 友達や保育者のそばで走ったり、追いかけたり、逃げたり、タッチしたりする。
- おいかけっこのイメージや楽しんでいることは一人一人違うが、同じ場で遊ぶことを楽しんでいる。
- 保育者も一緒に参加し楽しさを共有しながら体を動かしていけるようにする。
- ★止まる、方向転換をするなどの動きを取り入れられるように、タイヤを置いたり走る広さを考えたりする。

<子どもの実態>

<ねらい>

○予想される子どもの姿 ★環境構成 ●保育者の援助

【フープ】

○

○

●

○

●

★

【おいかけっこ】



【固定遊具】

○

○

●

★

研修生の報告書より

幼児期の運動あそびは、体の動きだけでなく人間関係、言葉、考える力、物事に対する意欲など、幼児期に育ってほしい資質・能力を身に付けていくことにもつながっていくと学んだ。さらに、大人に言われてやるのではなく、子ども自身が進んでやろうとしたり、体を動かす心地良さを感じたり、もっとやりたいと思えたりすることが大切であると学んだ。

子どもたちの姿を読み取る力ややってみたくなる環境を作ることの大切さを改めて感じた。やってみたくなる環境作りに行き詰まることも多かったが、3種類の動きや育みたい資質・能力を落とし込んでいなかったことに気付いた。